

## 「震災の経験を知恵に」

## 龍谷大学が復興支援フォーラム

宗門校の龍谷大学（入澤宗学長、京都市伏見区）は2月6日、東日本大震災から10年を迎えるにあたり復興支援フォーラム「あらためて震災を振り返り、その経験を知恵とする」をオンラインで開催した。津波で娘を亡くした男性や学生ボランティア経験者らが、日頃からの備えの大切さを語った。

龍谷大学では、学生ボランティアによる宮城県石巻市での復興支援活動、福島県の被災地の現状を学ぶ「福島スタディツアー」など、2011年から現在まで、のべ778人の学生・教職員が被災地を訪れている。

在学中、ボランティアに参加した白土奈央さん（26）は現在、千葉県の特別支援学校で教諭を務めている。「復興支援活動経験が、今の自分にどうつながっているか」をテーマに、赴任後初の防災訓練を振り返った。「学生ボランティアの経験もあり、災害時の動き方は自分なりに考えていたつもりだった。しかし、いざ行動に移すとパニックでもできなかった。担当するクラスには目や耳が不自由な生徒もいて、どの子を優先してサポートすべきか、生徒がパニックになったらどうすべきかなどの想定ができておらず、生徒を守る決意が足りないことを思い知らされた。東北でのボランティア経験を見つめ直し、日頃から災害に備えておく大切さをあらためてかみしめた」と話した。津波に襲われ全校児童108人のうち74人が死

## 「今、防災の種をまいておく」

で震災が起きた。停電で校内放送は使えず、避難訓練で使っていた経路は窓ガラスの破片が散らばって通れない。しかしこれらのトラブルは、日頃から震災について考えていれば簡単に想定できることだったと痛感している」と振り返り、「災害はいつ起こるかかわからない。今も震災後ではなく震災前かもしれない。この災害と災害の間であろう「災間」のうちに防災の種をまいておくことが大切。『正しく避難する』ことを今のように学び、準備・行動しておくことで、守れる命、変えられる未来がある」と語った。

また、阪神・淡路大震災でのボランティア活動をきっかけに、多くの被災地ボランティアに携わってきた神戸市兵庫区社会福祉協議会の長谷部治さん（47）は「これからのボランティアは、いろいろな団体と協働しながらの活動が求められる。長野のりんご畑の復興支援では、農家や地域の人たちと声を掛け合いながら取り組む、農地の復旧が可能になった。コロナ禍をはじめとする社会の変化に素早く対応できる形も模索していかなければならない」と話した。

同大学ボランティア・NPO活動センター長の筒井のり子教授は「体験を互いに語り合うことで、さらに深い学びに変えていけるとあらためて感じた。今後も全力で学生ボランティアをサポートしていく」とまとめた。

「当時、私は（隣町の）女川中学校に務め、卒業式の前日だった。教員も生徒も準備に追われる中